

## ふるさとに学ぶ

～149年目の春によせて～

明治5年、啓蒙小学校（中垣内村恩徳寺内）ができてから、本年7月1日で149歳を迎えます。

その間、たくさんの児童が学び、卒業していきました。

その一人一人がどんな思いで卒業していったのでしょうか。少なくともこの地で育ったことに、故郷に誇りをもっていてほしいと思います。

以前、北海道に住んでいたとき、故郷を遠く離れた函館の地のトラピスト修道院で、童謡『赤とんぼ』の作詞者の三木露風さんの石碑に出会いました。えっこんなところと言って驚きました。

また、小樽の地では、露風の母である碧川かたさんが暮らしていたという事実も衝撃的で、いろんなことがつながっていきます。

さらに、その碧川かたさんは婦人参政権や公民権運動に取り組んだ人であることを知ったとき、ふるさとを誇りに思うとともに函館や小樽がなんとなく身近に感じられたことや見ている風景が今までと違って見えたことを思い出します。



↑トラピスト修道院の駐車場前の庭園にある詩碑

本校では、様々な学習を通してふるさとのひとやもの、ことから学んでいきます。

ある学年では、地域にある石碑などから、その石碑が伝えている出来事や教訓を学びます。

またある学年では、故郷の偉人の生き様から自分自身を見つめ、自らの成長に結びつけようとしてきました。そして、過去の歴史を学ぶことで、その知恵を現在・未来に生かすことができると考えています。

今食べているお米のもとである「しんりき」という米を発見した人がいた私たちのたつの市。軍のクーデターを止めた人が生まれ育った町。相撲の祖の古墳がある町、その人は殉葬のかわりに埴輪をと考えた人として伝わっています。また、哲学ノートを出した三木清が生まれ育った町であるとか、それぞれ深く学びとってほしいことが他にもたくさんあります。

さて、これまで何度も「先が見えない世の中」という表現を使ってきました。

しかし、よくよく考えてみると、先が読めた時代なんてなかったように思います。

私たちの先人は、パソコンもなく、データ分析も瞬時にできない時代に、過去や経験に学ぶことで時代を切り開いてきました。だからこそ「愚者は経験から学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉も名言として残っているのではないでしょうか。

経験はある特定の出来事によるものですが、歴史というのはもっと大きな流れの中から刻まれていきます。未来を見通すために必要な、たくさんの素材が歴史につまっています。その歴史を追うことで、社会が変化するとき、それがなぜ起きたのかという要因が見えてくるはずで

子どもたちが会おう先人たちは、現在・未来に生かすことができる知恵や工夫を授けてくれるはずで

最後に、卒業していくみなさんに、「私たちのふるすとは、こうした国家の民主化をすすめた人が多くいる町であり、とことん考え抜くことの大切さや人と人とのつながりが大切であると社会に訴えてきた人たちが多くいた、そんな町の学校を卒業していくんだ」ということを忘れないでいてほしいと願います。